

平成 26 年度事業計画

事業運営方針

1. 前年度世界かき学会(WOS)は地域別5支部体制を導入した。本年度はカキ産業のグローバルネットワークの構築とともに地域密着型の活動を推進し、新たな飛躍を目指す初年度と位置づけて取り組む。
2. 国際かきシンポジウムは次年度北米での開催が決定している。アメリカ支部と連携して世界的な研究集会としての評価と地位を確かなものにする。
3. 国内では地域かきフォーラム事業やカキの研究者に対する研究助成事業を通じて国内カキ産業のさらなる振興を推進する。
4. 研究事業は前年度の課題を継続し、引き続き東北大学と共同研究を進める。

実施事業

1. 世界かき学会(WOS)の運営

(1) 世界かき学会5支部体制の活動推進

平成25年12月ベトナムで開催した第5回国際かきシンポジウムの会期中にWOS運営委員会が開かれた。今回の運営委員会にはWOS会員も出席し、地域別5支部の各支部長から各支部方針が発表された。今後の支部活動はこの方針に沿って展開されることになり、本部は下記の具体的な取組みを行う。

- ①各支部の方針及び具体的課題に対する活動の進捗状況を定期的に把握するとともにその内容をホームページで公開する。
- ②各支部には地域の特性・事情に合った支部活動を推進するスタッフ等の管理体制の速やかな整備を求め、必要に応じて助言調整を行う。
- ③支部活動の独自性を尊重しつつ、WOSのビジョン・使命・目標との整合性を図るため、本部支部間コミュニケーションのさらなる強化と本部業務の改善に取り組む。

(2) 第6回国際かきシンポジウム(IOS6)の開催調整

IOS6はWOS運営委員会の席上において北米マサチューセッツ州ケープコッドで開催することが決定した。広大な国土のアメリカでの開催には様々な利害の調整等が

予想されるため、早めの準備作業に着手する。具体的には本年度後半森会長が渡米しアメリカ支部長及び関係者並びに協力の申し出を受けているケープコッドにあるウッズホール海洋研究所など関係諸団体を訪問し基本事項を取りまとめる。

2. かき地域フォーラムの開催

本事業は国内のかき生産地で開催し、地域市民へのかき食文化の普及啓蒙、かき生産者・流通業者と消費者の交流、さらに地産地消の促進などを目的とする地域密着型のフォーラムである。これまでに赤穂市、佐渡市及び舞鶴市において開催してきた。

本年度の開催地は既に佐賀県生産振興部水産課との間で佐賀県唐津市に決定しており、唐津市及び佐賀玄海漁業協同組合関係者からもフォーラム開催について賛同の意思表示を得ている。5月中に現地にて具体的内容を検討する予定である。

過去3回の開催実績を通じてフォーラムの開催様式が定着してきたが、開催地のカキ養殖生産状況、消費者の意識やニーズ等に的確かつ柔軟に対応した効果的なフォーラムを目指す。

3. かきに関する研究を行う大学等の若手研究者に対する研究助成

本事業はかきに関する研究を行う大学や研究機関等の若手研究者個人又はチームに対して研究助成を行い、かきに関する研究促進と持続的展開を目的としている。

研究経費の捻出確保に苦勞する研究者を可能な限り支援助成してゆくため、平成24年度から2年続けて公募条件を緩和してきた。

公募案内は、日本水産学会、日本動物学会、日本生態学会のホームページに掲載依頼を行うとともに国内19の大学へ直接案内するなど広範囲に告知する。

本年度の助成件数・金額は昨年度と同様に3件、1件につき30万円とし下記のスケジュールで実施する。

公募要領の告知：9月初旬

公募締切：11月末

審査結果の発表：2月中旬

助成金交付：4月初旬

4. ノロウイルスフリーカキの生産法確立および養殖カキ品質向上のための研究

本年1月に大規模なノロウイルス食中毒が全国各地で発生し、大きな社会問題となった。今回は調理現場における人からの汚染が主な原因であり、カキは無関係であった。しかし、2006年に起こったノロウイルス胃腸炎の大流行とそれに伴って発生したカキに対する風評被害以来、「ノロウイルス胃腸炎の原因食品＝カキ」は一般消費者に定着している。すなわち、他の要因であれノロウイルス胃腸炎の流行が起こるとカキの生産や販売は大きな打撃を受ける。何としてもノロウイルスフリーのカキの生産が必要であるが、カキ体内からのノロウイルス除去等に関する基礎研究は手詰まりの状態である。

そこで本事業では、国内外におけるノロウイルス研究の情報収集を継続しながら、応用的研究に取り組む。具体的には、むき身カキを対象に、超音波発生装置を用いてカキ体内のウイルス・細菌を破砕する方法を検討する。超音波破砕は昨年度から貝毒プランクトンに対して検討をはじめたものであり、その応用編である。

本事業は当財団がこれまで実施してきた事業を発展的に継続、応用展開するもので東北大学及びNPO法人海の会との共同研究として進める。

5. カキなど二枚貝の特性を生かした環境評価法に関する研究

海洋環境、特に沿岸環境の汚染は沿岸生物の個体数の減少や多様性の喪失をもたらし、ひいては水産資源にも大きな影響をおよぼす問題である。さらに言えば、沿岸環境の保全は、周辺で生活する人間にとっても重要な課題である。沿岸環境の良否や変化を評価する指標としては、水質や底質などの物理化学的項目がこれまで主に用いられてきた。

近年、環境評価の新たな取り組みとして、そこに生息する生物を指標とし、生物が持つ因子の中で環境の変化に対し鋭敏な反応を示すものをバイオマーカーとして導入することは必須になってきている。生理生態特性を考えると二枚貝類は最適な指標生物である。

本事業は、昨年度末はじめて実施したマガキ血球遺伝子の網羅的発現解析法の適用をさらに進めて、マガキの環境ストレス遺伝子の発現動態を解析し、マーカーに適した遺伝子を決定することで新しくかつ有効な環境評価法を確立する。

本事業は東北大学との共同研究として進める。